ともに挑む。ともに実る。
MIZUHO みずほ銀行

今週の為替相場見通し（2024年10月7日）

総括表		注	先週の値動き レンジ			終値	今週の予想レンジ		
米ドル	（円）		141.65	～	149.01	148.64	145.00	～	151.00
ユーロ	（ドル）		1.0952	～	1.1209	1.0976	1.0880	～	1.1050
（1ユーロ=）	（円）		158.10	～	163.34	163.21	160.50	～	165.50
英ポンド	（ドル）		1.3070	～	1.3423	1.3123	1.3000	～	1.3200
（1英ポンド=）	（円）	*	189.57	～	195.53	195.12	192.00	～	197.00
豪ドル	（ドル）		0.6786	～	0.6943	0.6793	0.6700	～	0.6850
（1豪ドル=）	（円）	*	98.09	～	101.28	101.01	99.00	～	104.00

（データ）先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1．米ドル

金融市場部　為替営業第一チーム　大野　梨紗

（1）今週の予想レンジ:　145.00　～　151.00　円

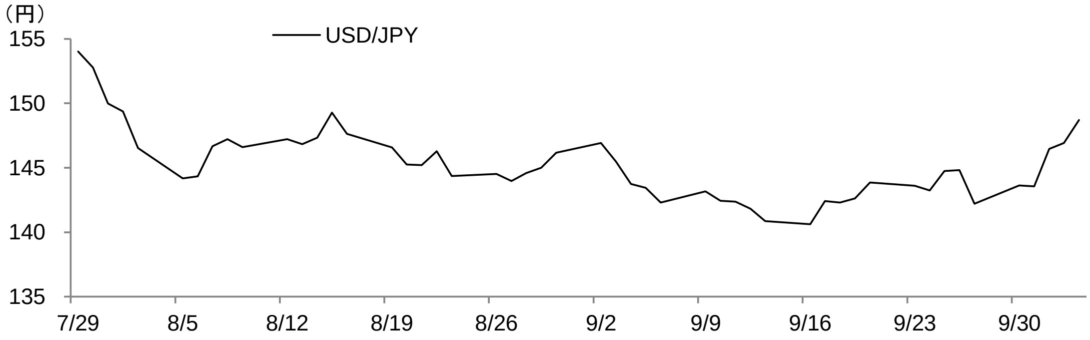
（2）ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は堅調に推移した。週初9月30日、142.81円でオープンしたドル/円は日経平均株価の大幅下落に連れて、一時週安値の141.65円まで下落。海外時間になると、米金利上昇とパウエルFRB議長によるタカ派な発言を背景に、144円手前まで急伸した。10月1日、ドル/円は日銀金融政策決定会合の主な意見（9月会合分）のハト派な内容を受け円売り地合いとなり、144円台半ばまで上昇。海外時間は、中東情勢が緊迫化する中で一時143円を割り込むも、その後米金利が上昇に転じ143円台半ばに値を戻した。2日、ドル/円は材料に乏しく、144円を挟んでもみ合い推移。海外時間は、石破新首相による利上げけん制発言を受けた円売りに加え、米9月ADP雇用統計が強い結果となり146円台半ばに上昇した。3日、ドル/円は前日からのドル買い地合いが継続し、8月以来となる147円台前半まで上昇。海外時間は、米9月ISM非製造業景気指数が堅調な結果となるも上値重く、147円付近で推移した。4日、海外時間に発表された米9月雇用統計が総じて強い結果となったことで米金利が上昇し、ドル/円は週高値149.01円まで急伸、148.64円で越週した。

今週のドル/円はドル買い地合い継続を予想。先週金曜日に発表された米9月雇用統計は、非農業部門雇用者数、失業率、平均時給が総じて良好な結果となった。これを受け米金利が上昇、ドル買いが加速し、ドル/円は2円超上昇した。米国における雇用の底堅さが示されたことで、市場では次回11月FOMC会合での利下げ幅は▲50bpでなく、▲25bpを見込む割合が9割を超えている。パウエルFRB議長が市場で高まる大幅な利下げ期待を牽制し続けていた中で発表された今回の雇用統計の結果は、ソフトランディング実現への自信を深化させ、底堅い米国経済の健在ぶりを示す大きな材料となった。このような状況下、今週は9日（水）にFOMC議事要旨（9月会合分）が公表される。前回会合で4年半ぶりに利下げを決定した背景や、今後の利下げペースについての議論の有無に注目が集まる。また、10日（木）には米9月消費者物価指数（CPI）が発表予定である。FRBが「雇用」に重きを置き始めてはいるものの、低下基調が一服しているインフレへの注目度は再び高まりつつある。予想を大きく上振れた場合、ドル買いでの反応から、ドル/円は上値を試す展開もあるものとみる。

（3）先週までの相場の推移

先週（9/30～10/4）の値動き:　安値 141.65 円　高値 149.01 円　終値 148.64 円



（資料）ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部　為替営業第二チーム　上遠野　暁洋

(1)今週の予想レンジ:　1.0880　～　1.1050　　160.50　～　165.50　円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

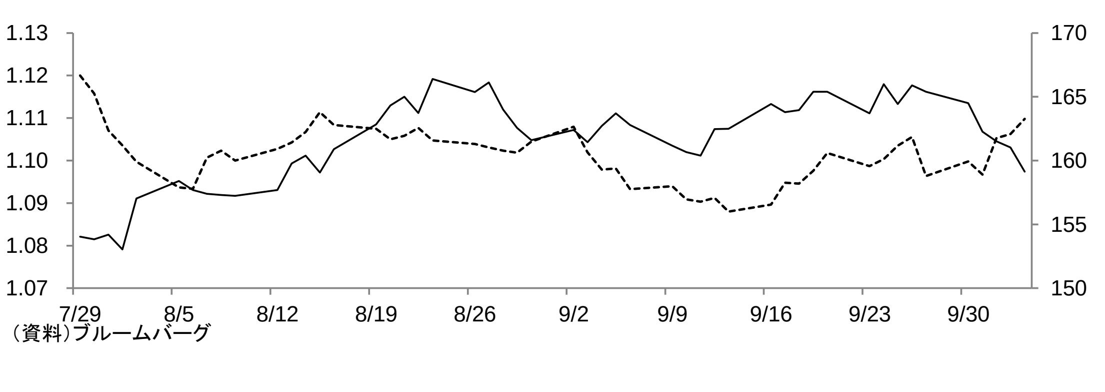
先週のユーロ/ドルは下落。週初9月30日、東京時間を1.1170でオープンしたユーロ/ドルは独 9月州別CPIが概ね市場予想並みの水準となったことで、茲許の下落に対する買戻しも入り一時週高値となる1.1209まで上昇した。しかし、ラガルドECB総裁が議会証言において、「サービス価格が和らいでいると考える理由がある」とし、インフレ目標達成に向けた自信を覗かせたことで1.1114まで反落し1.11台前半での推移となった。翌10月1日、ユーロ圏9月CPIが前年同月比+1.8%と前回(+2.2%)から低下し、独金利も低下したこと、またイスラエル軍のレバノン地上進行による中東情勢緊迫化によるリスク回避の動きも相まってユーロ/ドルは1.10台半ばまで続落した。2日、中東情勢緊張ムードの継続やECB高官のハト派発言、パウエルFRB議長による緩やかなペースでの利下げを強調した発言などを受け米金利上昇が材料視され、1.10台前半へじり安推移した。3日、欧州株の軟調推移や米9月非製造業景況指数の結果を好感した米金利上昇も相まって、ユーロ/ドルは軟調に推移し一時1.1008と1.10割れを窺う値動きとなった。4日、1.10台前半で推移した後、米9月雇用統計の強い結果を受け、ユーロ/ドルはストップを巻き込みながら1.09台半ばまで急落。週安値の1.0952を付けた後小幅に反発するも、米金利上昇の中で戻りは鈍く、1.0976での越週となった。

今週のユーロ/ドル相場は軟調な推移を予想。先週の概ね市場予想通りとは言え、ユーロ圏9月CPIの減速は目下ECB高官等のハト派発言と整合的であり、市場も17日(木)ECB政策理事会での追加利下げを90%以上織り込む方向感に違和感はない。他方、米国では4日に発表された米9月雇用統計が市場予想を大きく上回るサプライズとなり米金利が急上昇。来月FOMCでの▲50bp利下げの市場織り込みが完全に剥落し▲25bpをメインシナリオとする動きにドルの買戻しが加速しており、ECBとFRBの置かれている状況にやや開きが生じていることが、ユーロ/ドルのさらなる重しとなりそう。今週のユーロ圏指標としては、7日(月)のユーロ圏8月小売売上高、8日(火)独8月鉱工業生産、9日(水)独8月貿易収支などを予定しているが、基本的には今週も相次ぐECB高官等の発言に注視しつつ、ドルに大きく振らされる展開(特に10日(木)米9月消費者物価指数が最注目となる)に注意しておきたい。

(3)先週までの相場の推移

先週(9/30～10/4)の値動き:

	安値	高値	終値
(対ドル)	1.0952	1.1209	1.0976
(対円)	158.10	163.34	163.21



(資料)ブルームバーグ

３．英ポンド

欧州資金部　神田史彦

（1）今週の予想レンジ：　1.3000　～　1.3200　　192.00　～　197.00　円

（2）ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

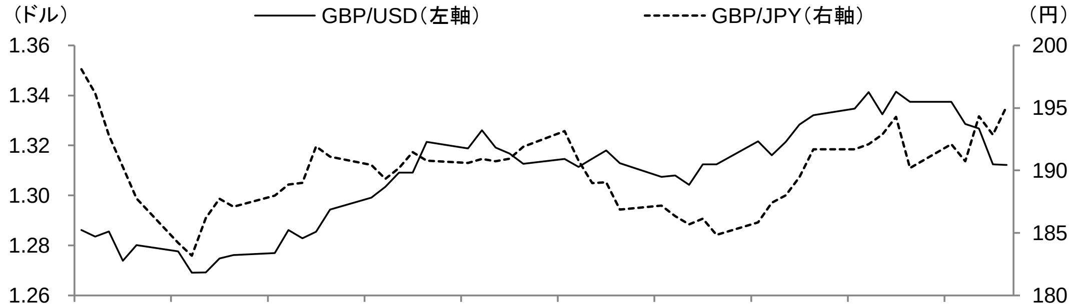
先週の英ポンド相場は、下落。週初9月30日は1.33台後半で取引を開始。週末金曜日に米9月雇用統計を控える中、方向感の出にくい立ち上がりに。パウエルFRB議長の発言がややタカ派的と捉えられ米国時間にドル買い戻し。10月1日はドルの買い戻しが継続する中、イランがイスラエルへのミサイル攻撃を準備しているとの報道がドル高を加速させ、英ポンドは1.33を割り込む。翌2日は、落ち着いた値動きとなるが1.33を上値に重く推移。3日は、ベイリー英中銀総裁が利下げを加速する旨のインタビュー記事が朝から報道されると、ポンド売りが加速し1.31を割り込む。週末4日は、朝方英中銀エコノミストが漸次的な利下げを指示するコメントを出し若干のポンド買い戻しで始まる。しかし米9月雇用統計が強い結果となったことでドル買いが加速し、週安値の1.3070まで下落。1.31レベルで週末を迎えた。対円では、週を通じて円安が進行したこともあり堅調推移。週初190円台前半で取引された後、2日に石破新首相の利上げ牽制ともとれる発言で円安が進行し、3日には一時、ポンド/円は195円台まで上昇。ポンド売りに押されたものの、4日の米9付き雇用統計後の円売りで194円台を回復し週末を迎えた。

今週の英ポンド相場は、上値重い展開を見込む。経済指標では、10日（木）の米9月消費者物価指数が注目となる。4日の米9月雇用統計後に、スワップ市場で織り込まれる11月のFEDの利下げは、▲0.25％程度と年内1回利下げにトーンダウンする中で市場の注目が集まるだろう。一方で、英中銀は、前回9月会合で利下げ票が減ったものの、市場では▲0.25％利下げが見込まれている。11日（金）に英8月GDPが発表されるが、単月指標のみであり、過去分の下方修正等がなく英米の金利差が拡大しないのであれば、ポンドを買い進める状況ではないと見る。また、中東情勢については、原油は上昇を始めているが、エネルギー価格上昇によるインフレリスク再燃までを懸念する向きはまだ表立ってはおらず市場はひとまず様子見。単純に地政学リスクとしてリスクセンチメントを悪化させる場合は、ポンド売りに繋がりやすい。投機筋のポンド買い持ちが相応に積まれていると言われており、下落時のスピードに注意が必要か。

（3）先週までの相場の推移

先週（9/30～10/4）の値動き：

	安値	高値	終値
（対ドル）	1.3070	1.3423	1.3123
（対円）	189.57	195.53	195.12



（資料）ブルームバーグ

4. 豪ドル

金融市場部　為替営業第二チーム　范　哲遠

(1)今週の予想レンジ:　0.6700　～　0.6850　　99.00　～　104.00　円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

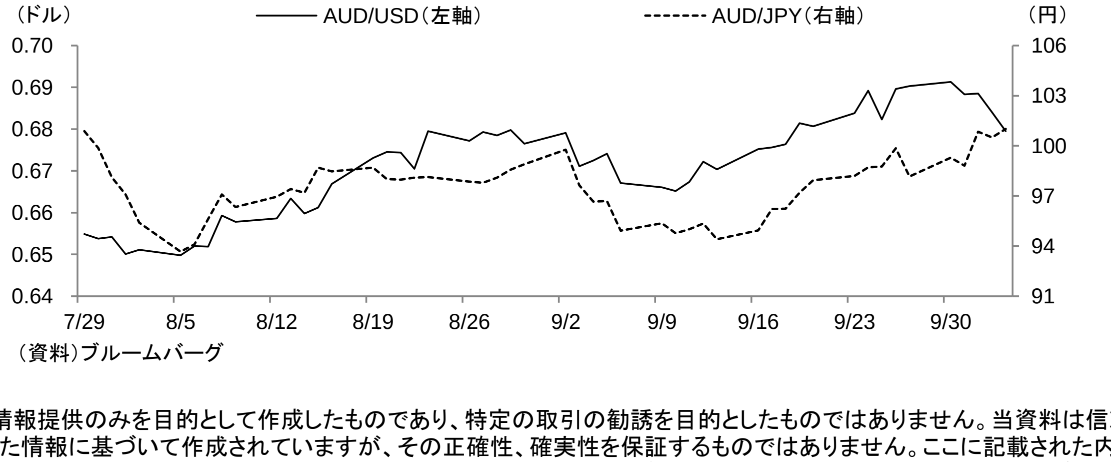
先週の豪ドル/ドルは下落。週初9月30日、豪ドルは0.6919でオープン。9月27日に発表された米8月PCE価格指数の伸びが鈍化したこと、中国の相次ぐ景気刺激策を受け鉄鉱石や原料炭の価格が上昇していること等を背景に豪ドル買いの流れとなり、一時20か月ぶり高値0.6943を付けた。その後、パウエルFRB議長が講演で追加利下げを急いでいないことを強調したことを受け、豪ドルは0.6920近辺まで下落。10月1日、豪9月小売売上高が予想を上回ったことから豪ドル買いが優勢となった。ただしロンドン時間以降、イラン・イスラエル間の緊張感の高まりから、ドル買いの流れが強まると豪ドルは下値を試す動きに。2日に発表された米9月ADP雇用統計が予想を上回る結果だったことを受けてドル買いが強まると、豪ドルは上値を押さえられたが、0.6880近辺にある支持線に支えられ0.6885近辺で引けた。3日以降、下値を追う展開となった。中東を巡る地政学リスクの高まりが意識され、世界的に株価が下落する中、豪ドルも連れ安に。この日発表された米9月ISM非製造業景況指数が予想を上回るとドルが一段と買い進まれ、豪ドルは0.68台前半まで下落。4日、米9月雇用統計が予想対比大幅に上回ると大幅利下げ期待の剥落からドルが買い戻される展開、豪ドルは一時週安値の0.6786を付け、0.6790近辺で越週した。

今週の豪ドルは、上値重く推移するものと予想。直近発表された豪州の経済指標を見ると、豪8月消費者物価指数(前年比)は市場予想通りの+2.7%と前回の+3.5%より鈍化が確認された一方で、豪8月小売売上高(前月比)は+0.7%と予想を上回る結果となった。インフレは低下基調も個人消費は強い結果と、強弱入り混じる内容であった。豪州については年内6割程度の利下げが織り込まれて状況ではあるものの、今後の利下げパスについて見通しの形成が難しい状況。今週は、豪州の重要経済指標の発表が少ないことから豪ドルは海外要因等につられて動くと予想する。先週金曜日に発表された米9月雇用統計は強い結果となり、米大幅利下げ期待から売られていたドルが買い戻される中、豪ドルは下落。引き続き米国の利下げ期待が剥落する局面においては、豪ドルにも下押し圧力がかかるだろう。今週の注目イベントは8日(火)豪10月ウエストパック消費者信頼感指数、同日にRBA金融政策会合議事要旨、9日(水)RBNZの政策金利発表が予定されている。

(3)先週までの相場の推移

先週(9/30～10/4)の値動き:

	安値	高値	終値
(対ドル)	0.6786	0.6943	0.6793
(対円)	98.09	101.28	101.01



(資料)ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。